



君は覚えている？

新生 ヒロ

ミルクティー

それは8月のことだった。

大学も休みになったし、君に手紙を書こう、そう思って新しい便せんと君が好きな青色のペンを買ったんだ。

こんにちは...

その後が続かない。

書き始めてからもう2時間がたとうとしている。

僕はキンキンに冷えた部屋を出て近所のコンビニに出かけた。

ここもキンキンに冷えている。

雑誌をパラパラとめくって、お菓子の新商品をチェックし、飲み物の並んだ一番奥へ。

目をつぶっていても歩けると思うくらい、僕はここの常連だ。いつものミルクティーを手に取りレジに行く。

「いらっしゃいませ。」

「あっ。」

驚いた声に顔を上げる。

そこにいたのは、

同級生の岡さん？でも彼女は県外の大学にいったはず。

「このままでよろしいですか？」

「はい。」

「夏休みの間バイトすることにしたの。また来てね。」

ミルクティーが営業スマイルではない笑顔と一緒に手渡された。

僕のこと、覚えてくれてたんだ。

そこから家までどうやって帰ったのか記憶がない。

僕は透明人間ではなかったんだ。

8月1日

ゆっくりと卒業アルバムを開けた。
これまで何度も何度も繰り返して見ていたから
探さなくても君のクラスのページを開くことができるんだ。

3年G組 岡 ひなた

君はさっき僕に向けたのと同じ笑顔でそこにいた。
まさかこんな偶然があるなんて思ってもみなかった。
しかも、僕のことを知っていたなんて。

僕はさっき君が手渡してくれたミルクティーのキャップをひねった。
キャップは簡単に開いた。

ここで昔のフォークソングなら
♪でも君の心の鍵はそうは簡単に開かないよ♪
とでも続くのだろうか。
そんなことを考えていたら...
君がここにいるわけじゃないけど、なぜか緊張して頭の中がぐるぐるまわってきた。
僕は一口も飲まずに、強くキャップを閉めた。

落ち付け。
ただ、僕の家近くのコンビニでバイトをしているだけだ。
僕のことだって同級生にいたよね？くらいで、名前まで覚えてくれてるかどうかは
あやしいぞ。
はしゃぎすぎないように...浮かれすぎないように...
僕は自分に言い聞かせながらもう一度ミルクティーのキャップをひねった。

君がよく飲んでいたので、いつか間接キス...なんて
10代のヤロウなら一度はするハズの妄想をたくましくしていたら
いつもコレを選んで、仲のいい友人ならついでに飲み物をもって頼むと
「何がいい？」と聞くヤツはいない。
僕の定番になっていた。

ミルクティーを半分飲んで、机の上の便せんに目をやる。
僕はさっきまでの今にもあふれ出しそうだった気持ちが

少し静かになっているのを感じた。

とにかく、手紙作戦はやめだ。

夏休みは短い。

君の夏の記憶に残るだけなんてイヤだ。

でも、どうすれば？